

# 果樹カメムシ類の発生動向（球果量と越冬量）

果樹カメムシ類は、スギ・ヒノキの球果を主な増殖源としているため、その量が多いと、その年の新成虫の発生量は多くなり、翌年の越冬量も多くなる。球果量の調査を開始した平成22年以降の球果量と翌年の越冬量を比較したところ、球果量の指数が60を超えると、越冬量が顕著に多くなり、翌年春には注意報が発表されている。平成30年の球果量は多く、越冬量は多いと見込まれることから、平成31年の春は注意が必要である。

年	H30	H29	H28	H27	H26	H25	H24	H23	H22
球果量指数	76.2	73.8	32.1	19.0	63.1	60.7	48.8	64.3	40.5
チャバネアオカメムシ越冬量	1.0以上の可能性	1.68	0.53	0.15	1.33	2.63	0.08	1.74	0.13

H30、H27、H26、H24、H22は3～4月に注意報発表  
 （警報を発表したH8の越冬量は4.94）

越冬量：球果調査の翌年3月頃、落葉樹の落ち葉2/m<sup>2</sup>中に休眠していたチャバネアオカメムシ成虫数の平均

球果量指数： $(7 \times \text{極多地点数} + 6 \times \text{多地点数} + 5 \times \text{やや多地点数} + 4 \times \text{中地点数} + 3 \times \text{やや少地点数} + 2 \times \text{少地点数} + \text{極少地点数}) / (7 \times \text{調査地点数}) \times 100$



ヒノキ球果（果樹カメムシ類の主な増殖場所）



チャバネアオカメムシ

防除は、テルスターフロアブル、スタークル/アルバリン顆粒水溶剤等のネオニコチノイド系薬剤及び合成ピレスロイド系薬剤が有効である。